

一夏季大学雑感一

第11回夏季大学「新しい気象」講座雑感

気象協会道本部 若林徳司

回を重ねて第11回を迎えた夏季大学講座は、この夏も日本気象学会北海道支部と札幌市青少年科学館との共催により7月28日、29日の両日にわたり開催されました。

28日は青少年科学館実験室、29日は日本気象協会北海道本部会議室をお借りしての開催である。両会場とも多少手狭な感はいなめないが、蒸し暑いこの時期での開催でもあり、冷房設備の整ったところと思いい会場を選定したところ、皮肉なもので7月の上旬から中旬にかけての夏日は下旬には全く見られず当日は冷夏のまっただ中、お世話役の気配りも取り越し苦労に終わったのである。

しかし、講座そのものは定員60名を募集したところ、52名の参加希望がありそのうち50名が受講され、近年にない盛況振りであった。受講された方々の顔を拝見すると見なれた方々が数多く参加されており、毎年この講座を楽しみにしておられる様子が、うかがえました。

さて、講座は「科学の箱舟」として札幌市青少年科学館が昭和56年に開館した2年後の昭和58年から毎年開催され、昨年は第10回という大きな節目を迎えることが出来ました。

そこで今年は新たなスタートという観点から、担当理事、幹事および青少年科学館の水野氏にも加わって戴き何か新しい企画でのスタートを切りたいと論議を重ねましたが、結局、名案は浮かばず、限りある予算の中での大きな変化を求めることは無理との方向性が出され、先ずはこの講座を楽しみにされている方々のために「新しい気象」という題にあまり拘らずタイムリーで、かつ判りやすい話題を提供しこの講座を継続していくことが大切との結論になりました。

そこで今年の講義は、タイムリーな話題ということで、平成4年7月に札幌で発生した「竜巻」を取り上げ、また気象とは多少掛けはなれますが、スイフト・タートル彗星の回帰による「流れ星の大出現」という身近な話題も取り上げました。

その他に、地球的な視野に立って、環境問題を考えるという意味から「気候変動」さらには、気象情報が流通業界にどのように利用されているかを知るために「流通と気象」など合わせて4題の話題を提供して戴きました。

いずれの講義も各講師には熱心な講演を戴き、また受講生の方々からも、活発な質問が寄せられ活気ある講座になったことは、お世話する者として、この上ない喜びに堪えません。

最後になりましたが、この講座の開催に当り、会場の準備や接待役を快く引き受けて戴いた札幌市青少年科学館の学芸係、気象協会北海道本部の総務係の皆さんに、この紙面を借り厚く御礼申し上げます。

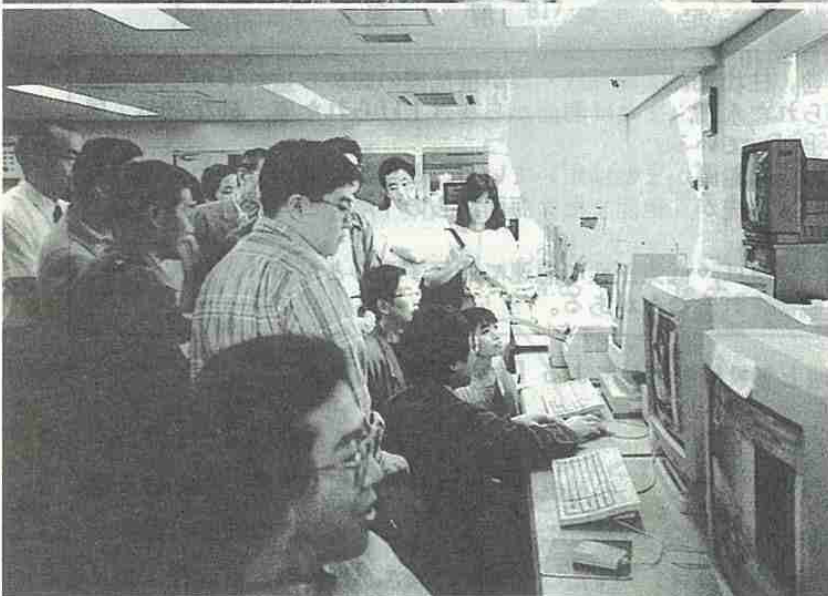


第11回夏季大学「新しい気象」講座

◀ 受講風景
(青少年科学館にて)



◀ 受講風景
(気象協会北海道本部にて)



◀ 気象情報センター見学
(気象協会北海道本部にて)